

# 平成 30 年度 私立学校専門研修会・教育課程部会 実施報告書

研究のねらい

自立を促すフレキシブルな教育課程の実現に向けて  
～新・学習指導要領と高大接続の観点から授業改善と評価を考える～

高等学校の新・学習指導要領は2018年3月に告示され、2018年度は周知徹底の時期に当たり、2022年度より年次進行で実施される。今回の改訂では「資質・能力の育成」のための「主体的・対話的で深い学び」が軸となり、アクティブ・ラーニング型授業の実践の推進、学力の3要素に基づく観点別評価の見直しが進められる。

また、高大接続改革では、大学入学共通テストは2019年度までプレテストを実施し、同年実施大綱を公表し、2020年にスタートする。記述式問題の全面的導入は国語・数学のみとなり、英語4技能を測る試験については2030年までは民間試験と現行マークシート方式の併用と、いずれもトーンダウンしたが、新・学習指導要領との整合性、受験生の負担増など課題は多く、今後の動向から目が離せない。

そこで今回は、文部科学省による新・学習指導要領と大学入学共通テストの最新動向に関する講演、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業展開・改善のために効果的な授業リフレクション（振り返り）に関する講演、多彩な教育プログラムを通して、「確かな学力（洞察力、判断力、コミュニケーション能力）、人生の進路を切り拓く力」を育成している青山学院高等部、青山学院中等部の視察、参加者同士の情報交換を通して私学の多様性を活かした教育課程デザインを考察する。

会 期 平成30年6月22日（金）

会 場 TKP渋谷カンファレンスセンター  
青山学院高等部、青山学院中等部

参加者数 150名

参加対象 理事長・校長・副校長・教頭・教務主任及び教育課程編成等担当教員

基本日程

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	30	20	40	10	10	50	20	45	45	
6月 22日 (金)	受付	開会式	講演Ⅰ	講演Ⅱ	昼食 ・移動	全体会	授業視察 ・施設見学	移動	分散会	閉会式

## 研修プログラム

1. 講演 I 「新・高等学校学習指導要領と大学入学共通テストについての動向・解説」  
講師 淵上 孝 文部科学省初等中等教育局教育課程課 課長  
講師 山田 泰造 文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室 室長
2. 講演 II 「『主体的・対話的で深い学び』の授業をデザインするための授業リフレクション」  
講師 鹿毛 雅治 慶應義塾大学教職課程センター 教授
3. 学校視察 青山学院高等部、青山学院中等部  
学校紹介／施設見学／授業見学
4. 分散会 新・学習指導要領と高大接続の観点から授業改善と評価を考える

## 学校紹介（青山学院高等部、青山学院中等部）

中等部は、1947(昭和22)年、戦後の教育改革の中で、新しい男女共学の中学校として開設された。高等部は、戦前の中学部と高等女学部はそれぞれ新制高等学校の「高等部」「女子高等部」となり、1950(昭和25)年に合併して男女共学の「青山学院高等部」となった。1986(昭和61)年に一貫性の強化を図るため中高一本化し「青山学院高中部」となり現在に至る。教育理念は、「青山学院教育方針にもとづいて、ひとりひとりの生徒の人格を育み、その自己実現を支える。また、与えられた自分の力を他者のためにも使い、隣人と共に生きることを喜び、平和な社会に貢献する人間の育成を目指す。」としている。中等部は、基礎学力の修得と同時に、個性と自主性を伸ばすために、キリスト教信仰にもとづく人格教育(礼拝・聖書の授業・奉仕活動・宗教行事)、ゆとりを持ちながら基礎学力の充実(週5日制31時間授業・1クラス32名)、ユニークで特色ある3年生の選択授業(週2時間の従来の科目にとらわれない20以上の講座)が特色である。また、新校舎で教科センター方式を実施しており、生徒にICTを活用した21世紀型スキルを身に付けさせ、主体的な学びを促し、問い続ける力を育てる新しい教育を進めている。高等部は、中等部と同様、キリスト教信仰にもとづく人格教育、確かな学力(洞察力・判断力・コミュニケーション能力)と人生の進路を切り拓く力を育てるための多彩な教育プログラム(50講座以上のかかなり高度でユニークな授業)、伝統的な英語教育(各学年5時間の必修、2年次で2講座4時間、3年次で7講座15時間の選択授業)が特色となっている。また、2015年度より文部科学省からスーパーグローバルハイスクールに指定されている。

## 講師・指導員（順不同）

淵上 孝	文部科学省初等中等教育局教育課程課 課長
山田 泰造	文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室 室長
鹿毛 雅治	慶應義塾大学教職課程センター 教授
渡辺 健	青山学院高等部 部長
敷島 洋一	青山学院中等部 部長
吉田 晋	富士見丘中学高等学校 理事長・校長
中川 武夫	蒲田女子高等学校 顧問

## 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

清水 哲雄	学校法人鷗友学園 理事長
鈴木 弘	香蘭女学校中等科高等科 校長
北村 聡	京都外大西高等学校 校長
大多和 聡宏	開星中学高等学校 理事長・校長
助川 幸彦	学校法人村田学園 前副理事長
山本 与志春	学校法人青山学院 常務理事
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長

日程・プログラム

会場：TKP渋谷カンファレンスセンター 3階 ホール3A

司会：川本芳久 一般財団法人日本私学教育研究所事務局長

8:30	受付・資料配付
9:00	開会式 主催者挨拶 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所理事長 役員・専門委員紹介 研修会運営方針説明 清水 哲雄 一般財団法人日本私学教育研究所教育課程専門委員長 日程説明
9:20	講演Ⅰ 演題 新・高等学校学習指導要領と大学入学共通テストについての動向・解説 (高等学校学習指導要領改訂) 講師 淵上 孝 文部科学省初等中等教育局教育課程課 課長 (大学入学共通テスト) 講師 山田 泰造 文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室 室長
(10:00)	講演Ⅱ 講師紹介：清水哲雄・専門委員長 演題 『主体的・対話的で深い学び』の授業をデザインするための授業リフレクション 講師 鹿毛 雅治 慶應義塾大学教職課程センター 教授
12:10	昼食 / 移動
13:10	学校視察 全体会場：青山学院高等部 (PS 講堂) 青山学院高等部 / 青山学院中等部 視察校代表挨拶 学校紹介(高等部) 渡辺 健 青山学院高等部 部長 視察校代表挨拶 学校紹介(中等部) 敷島 洋一 青山学院中等部 部長 授業見学【第5限(中等部：13:15～14:00 / 高等部：13:40～14:30)】 各自、自由に見学
15:20	移動
15:45	分散会 会場：TKP渋谷カンファレンスセンター テーマ：新・学習指導要領と高大接続の観点から授業改善と評価を考える Aグループ 会場：8階 カンファレンスルーム8C 司会・指導助言：山崎 吉朗 日本私学教育研究所主任研究員 Bグループ 会場：8階 カンファレンスルーム8A 司会・指導助言：助川 幸彦 学校法人村田学園前副理事長 Cグループ 会場：8階 カンファレンスルーム8B 司会・指導助言：北村 聡 京都外大西高等学校校長 Dグループ 会場：6階 カンファレンスルーム6A 司会・指導助言：清水 哲雄 学校法人鷗友学園理事長 司会・指導助言：鈴木 弘 香蘭女学校中等科高等科校長 Eグループ 会場：7階 カンファレンスルーム7A 司会・指導助言：山本 与志春 学校法人青山学院常務理事 Fグループ 会場：10階 カンファレンスルーム10A 司会・指導助言：大多和 聡宏 開星中学高等学校理事長・校長
16:45	閉会式 会場：TKP渋谷カンファレンスセンター 3階 ホール3A 総括 清水 哲雄 一般財団法人日本私学教育研究所教育課程専門委員長
17:00	解散

## ◆概要◆

平成30年6月22日(金)、TKP渋谷カンファレンスセンター、青山学院高等部、青山学院中等部(東京都渋谷区)で開催された「全国私立中学高等学校 私立学校専門研修会 教育課程部会」(以下、当部会)は、定員120名を超える150名が参加した。

「自立を促すフレキシブルな教育課程の実現に向けて～新・学習指導要領と高大接続の観点から授業改善と評価を考える～」を研究のねらいにした当部会は、午前には2018年3月に告示された新・学習指導要領、2020年度からスタートする大学入学共通テストに関して、文部科学省より淵上孝・初等中等教育局教育課程課長、山田泰造・高等教育局大学振興課大学入試室長を招いて、それぞれの解説、最新の動向を伺った。さらに「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業展開・改善のために効果的な授業リフレクション(振り返り)に関して、鹿毛雅治・慶應義塾大学教職課程センター教授の講演を行った。



午後からは、会場を青山学院高等部・中等部に移し、同校の紹介、施設見学、授業視察を行った。学校視察後は再び会場をTKP渋谷カンファレンスセンターに移し、主に担当教科ごとに6つのグループに分かれ、分散会が行われ、参加者同士が自校の現状を報告し情報交換が行われた。

## ◆開会式◆

### 主催者挨拶(吉田 晋・当研究所理事長)

冒頭の挨拶で吉田・理事長は、高大接続改革について「大学入学選抜での英語4技能の導入に当たっては、すでに相応の資格を取得している生徒に不公平が生じることを十分な配慮を求めたい」と述べ、文部科学省による学校の現状に即した対応に期待を示した。



### 研修会運営方針説明(清水哲雄・教育課程専門委員長)

清水・専門委員長から以下の通り、運営方針説明があった。

これまで多くの時間をかけ、高大接続改革、つまり、大学教育、高等学校教育、大学入試の3つをセットにして一体的に改革するという議論が続いてきた。それにほぼ10年に一度の学習指導要領改訂が加わったというのが現在の状況である。議論が進むにつれ、喫緊の課題として出てきたのが評価の問題である。とりわけe-ポートフォリオの取り組みについては各学校では進めていると思われるが、その活用方法等については不確定な部分も多い。今回は盛り沢山の内容となっているが、多くのものを学校に持ち帰り、各校の独自性に照らし合わせ、新たな取り組みに役立てて頂きたい。



## ◆講演 I ◆ 「新・高等学校学習指導要領と大学入学共通テストについての動向・解説」

(高等学校学習指導要領改訂)

講 師 淵 上 孝 文部科学省初等中等教育局教育課程課 課長

新しい高等学校学習指導要領を 2018 年 3 月に告示した。一昨年までの中央教育審議会（以下、中教審）の審議を経て、昨年、小・中学校の学習指導要領を告示し、今回はそれに高等学校が続くこととなった。高等学校では特に新しい教科・科目を新設することや高校生をめぐる様々な制度改正（選挙権年齢や成年年齢の引下げ）への対応を重視している。2018 年 7 月中旬には、その趣旨の説明及び必要な協議等を行うことを目指している。実施は 2022 年度入学生からだ。総則等の部分ではカリキュラム・マネジメント等を小・中学校で先行実施しているように、高等学校でも来年 4 月に先行実施される予定である。



新学習指導要領の大きな考え方としては、「社会に開かれた教育課程」が掲げられている。つまり、子供たちの学びを学校のみが捉えるだけではなく、地域や社会等で価値を共有しながら、全体で育てていく理念である。また、学習の内容を維持した上で、「知識の理解の質を高める」ということも大きなキーワードである。そして、高等学校教育を含む初等中等教育改革と大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革の一体的な改革である高大接続改革の中で改訂されたものである。

この中で 3 つの大きなポイントがある。まず、1 つ目に資質・能力の再整理をしていくことである。資質・能力の 3 つの柱である「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を基に全教科等の改革に当たっていく。

2 つ目は「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善についてである。1 つ目の資質・能力をしっかりと身に付けていくための授業をどう進めていくかがポイントとなる。中教審にてアクティブ・ラーニングとは何かを議論した結果、「主体的・対話的で深い学び」という呼称になった。主体的な学びは、自らがなぜ学ぶのか、また、自分の課題は何なのか、そしてそれを振り返り、次につなげていくにはどうすればよいのかという学びをイメージしている。対話的な学びは、他者や先哲の方々と対話をしながら自らの考えをさらに深めたり広げたりする学びである。深い学びというのはそれぞれの教科の特質に合わせた見方・考え方に関連して、各教科の本質に迫る学びである。こういった視点からそれぞれの授業実践を変革していき、資質・能力の育成につなげていくことがねらいである。学校を出てからも、社会の中で一生涯学び続けることができるように、その学びの支えになるものをつくるのが目的である。

3 つ目は、学校教育の改善・充実に関して、学校全体あるいは教科・科目におけるカリキュラム・マネジメントについてである。カリキュラム・マネジメント確立のため、内容の時間の適切な配分、リソースの活用、PDCA サイクルの確立が示されている。各教科・科目を横断的に見るための基盤となる力を付けることは、全体の力を付けていくためには必要である。新・学習指導要領の中でも特に 2 つの資質・能力を育成していくことに言及している。1 つ目は、学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）、2 つ目は現代的課題に対する資質・能力である。これらを育てるためには教科等横断的学習を充実させていくことが必要である。各教科・科目にどのように入れ込み、どのように結び付けていくのか、どのように関連付けていくかが重要である。これが学校教育の改善・充実の大きな柱となっている。

教科・科目の改善事項に関しては、特に国語科について、小・中学校ではかなり改善されている。1 つ目に語彙の確実な習得、2 つ目に情報を的確に理解し、話や文章で適切に表現する力の育成が重視されている。子供たちが教科書の文章を読み解けていないのではないのかという問題提起もなされている中、情報と情報との関係を捉えて理解することや、情報を取り出したり活用したりする際に行う整理の仕方や手段等について、しっかり教え

ていく必要がある。今回、高等学校の国語科では、「推論の仕方」についての指導事項なども盛り込んでいる。大学等に進学した際にも役に立つ「アカデミック・ライティング」や「クリティカル・リーディング」の基盤となるような力についても育成していきたいと考えている。また、理数教科に関しては日常生活や社会との関連を重視したものを旨とする。特に理科は観察・実験を通じて科学的探究の力を身に付けてもらい、数学では必要なデータを収集・分析をして、その傾向を踏まえて課題を解決するための統計教育も充実している。道徳に関しては、中学校で「特別の教科 道徳」を学習した生徒たちが入学してくることを踏まえ、高等学校においても校長のリーダーシップの下に道徳教育推進教師を中心に全教師が協力して道徳教育を展開する。また、公民科の「公共」及び「倫理」、「特別活動」の3科目に関しては、人間としての在り方・生き方に関する中核的な指導の場面とする。外国語に関しては「発信力」の強化などが課題であったが、4技能を総合的に育成していく。職業に関する教科・科目について、技術革新や技術の高度化に対応した教育の推進などの取り組みを行う。

その他、中学校との一貫した学びを実現するために、学校の実情に応じて義務教育段階の基礎的な学び直し場の設けることとしている。また、主権者教育、消費者教育、防災安全教育などの充実も必要であり、介護、スポーツ、情報教育、部活動、発達の支援などに関しても力を入れていく。

全体の教科・科目数のうち、27科目が新科目、「総合的な学習の時間」を合わせると28教科・科目となり、基本的な枠組みは変わらないが、国語科を中心として言語能力の育成を一層強化し、探究する力の育成を重視する。

国語科に関しては、中教審の議論の中で「教材の読み取りが指導の中心になることが多く、話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の学習が十分に行われていない」、「古典の学習について、言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中で生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」といった指摘もあり、そのような課題等を踏まえ、科目構成の見直しを図った。なお、選択科目については4つの新科目で構成しているが、そのうち「論理国語」「文学国語」「国語表現」については、「思考力・判断力・表現力等」の言葉の働きを捉える3つの側面（①創造的・論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③他者とのコミュニケーションの側面）のそれぞれを主として育成する科目として新設している。

次に地理歴史科及び公民科であるが、特に地理歴史科に関しては、高等学校段階で日本史を学ばなくていいのかという指摘と、現行のカリキュラムでは近現代史の学習が不十分ではないかという指摘があり、大きく改善をした。両教科全体の大きな改善の柱として、「現代の諸課題の解決を視野に入れながら、社会的事象を考察していく」ことを掲げている。現在起こっている事象は何を原因として、どの地域で、どのような関係性で起きているのかということをしっかり学ぶことをねらいとする。新しい「地理総合」は「現代の様々な諸課題を地理的な視点を使って捉えていく」ことを掲げている。地理的環境と生活文化の関係性をいくつかの事象で学んでいく。新しい「歴史総合」は、近現代の18世紀以降の内容について日本史と世界史を総合的に見ていくことを重視している。これは、現在起きている様々な課題の多くは近現代に端を発することが多いことから、現代社会をより細かく見ていくために近現代の歴史を学ぶ。歴史的なものの見方や歴史的な学び方を学習することを重視していく。公民科の新しい必修科目の「公共」に関しては、自分たちが参画する公共的な空間を作るためにどのような価値判断を持ちながら取り組むのかを学ぶことをねらいとしている。概念的な知識も学び、試行実験を通して考えていく。

家庭科に関しては、成年年齢の引下げにより重要性が非常に高くなってきている消費者教育等の充実を図っている。

情報科に関しては、プログラミングやネットワーク、データベースの基礎を必ず履修することが決定した。

総合的な探求の時間に関しては、探究の過程の中で、例えば、比較する、分類する、関連付けるなどの「考えるための技法」が、自在に活用できるものとして身に付くことが期待されている。学習活動が探究的であることを重視している理由は、学習から探究へと自立性が高まり、それに伴い探究に関わる厳格性がより高まっていくと考えていることにある。

現行のカリキュラムの中でも工夫できる部分は徐々に改善を進めていってもらいたい。特に私立学校のそれぞれのダイナミズムを活かして先んじた事例を作ってもらいたい。

## (大学入学共通テスト)

講師 山田 泰造 文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室 室長

大学入学共通テストを中心に高大接続改革の動向について説明していく。人材を世の中に輩出していくため、高等学校教育と大学教育の教育改革は大変重要である。AI やグローバル化が進み、世の中が急激に変化していく中、10年後、20年後の職業や社会の変化は想像ができない。そういった環境の中で生き抜く人材を育てていくには、知識・技能だけでなく、それらを元に思考力・判断力・表現力を養い、主体的に共同しながら学ぶことが必要である。これを実現する高等学校、大学、その両者をつなぐ大学入試の変革を進めている。高等学校教育改革に関しては、学習指導要領の見直しを2018年3月に告示した。これに加え、「高校生のための学びの基礎診断」を導入する取り組みを進めている。



大学教育改革に関しては、大学には3つのポリシー（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）を策定・公表し、評価してもらう。それぞれの大学独自のディプロマ・ポリシーに基づいた取り組みをして、それを認証評価でチェックをするという教育改革を進めている。

大学入試の観点も変化しており、3つの大きな変更がある。

### (1)大学入学共通テストを2020年度（2021年1月）に実施

マークシート中心は変わらず、記述問題を国語で3問、数学で3問追加してより深い知識とそれに伴う思考力・判断力・表現力を問う。

### (2)英語の4技能の評価の実施

大学入試に実際に利用されている民間の資格・検定試験を活用し、大学入試センター（以下、センター）から大学に結果を送信する仕組みの構築を予定している。

この2つが大学入試改革の軸である。また、大学の個別入試の出願時期と合格発表の時期を遅らせる等、日程の面でも改革を進め、調査書の活用等も求めている。

2017年11月に行われた試行調査では、5万人規模の予定のところ、述べ17万8千人の生徒が参加した。様々な評価を頂き、課題が見えた。新しい問題を重視したこともあり、正答率も芳しくなかったが、2018年11月に大学を会場として現大学入試センター試験の問題と新しい問題を組み合わせてバランスの良い問題を作問して試行調査を行う。数学の記述式問題に関しても正答率のバランスを保つための改善を考えている。特に数学の回答率が低いためこの上昇を目指す。

### (3)成績の表示のあり方

記述式については、数学に関しては正答か不答となるが、国語は各小問4段階で採点し、3問あわせて5段階で総合評価をする予定であり、マークシート式問題の素点も表示する。全教科でも総合的に段階的評価を用いる。昭和50年代の共通一次試験が採用された頃は大学志望倍率が2倍程度であったが、大学側も効率的な入試をしており、公平に落とさなければならない時代で、マークシートの普及で得点積み上げ式の採点が一般化されていた。多種選択式の一点刻みの問題で測れる能力もあるだろうが、そのみで測るには限界があると考えている。段階表示の工夫も入試改革の中で活かしていきたい。記述式の問題に関して一番の課題が採点であり、試行調査の中で多くの反省点があった。センターと採点業者の連携にて実施する。今回の試行調査を通して、作問の時点で採点業者とすりあわせをして一体化を図っていくことと、事前に準備した採点基準だけでなく、実際に受験者の解答を見て改めて採点基準を設けて採点していくことを考えている。また、採点の際にセンターの業者へのチェック頻度も増やすことを検討している。採点の方式も1人で採点するのではなく、2人以上で行い、採点が一致しなかった場合、採点リーダー、総括採点リーダー、最終的には採点基準を含めた合議で決めていき、最終チェックを経て複層的に採点する。

次に英語の民間試験業者の活用についてである。文部科学省から出された 2017 年度の高校 3 年生の英語能力の調査の結果では「書く・話す」力が低く、わが国の英語力は十分ではないことが明らかになり、語学力を根本的に考えていかなければならない時期に来ている。この調査を参考に CEFR（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠）に合わせてレベルを設定する。また、「書く・話す」力が評価をされていない実態があるため、大学入学共通テストにてこの 2 技能評価を新たに導入し、英語 4 技能を測ることで高校英語を根本的に改革していきたいと考えている。センターから大学への成績の提供に関してはデータでの提供を考えている。また、高等学校の学習指導要領との整合性も考える。民間試験の会場に関して、学校を会場とする際は、外部の試験監督を配置する。2018 年 3 月に決まったのは 7 団体 23 の民間試験であるが、民間試験業者側には条件が設けられている。

課題として、1 つ目は新たな受験生への対応、経済的に困難な受験生への対応がある。2017 年 12 月に閣議決定された「新しい経済政策パッケージ」の中に「高等教育の無償化」があり、内容として、①大学授業料の減免②給付型奨学金の導入という 2 つの柱で成り立つ。その給付型奨学金の中に大学入試等の受験料も含まれている。それに加え、英語の受験料も検討中である。2 つ目に各試験には難易度に違いがあることである。そのため各受験者の英語力にあった試験を受けるように指導してほしい。

AO・推薦入試に関しては、学力を評価する試験を導入することを検討している。

調査書の活用により高校 3 年間の学びを大学に活かせるように活動していく。これに伴い、関係の団体と協力しながら e-ポートフォリオの導入も模索している。調査書の電子化を進めることでこれまでの学びを大学にも活かしていきたい。

## ◆講演Ⅱ◆ 「『主体的・対話的で深い学び』の授業をデザインするための授業リフレクション」

講師 鹿毛雅治 慶應義塾大学教職課程センター 教授

新・学習指導要領で取り上げられた「主体的・対話的で深い学び」につき、それを実現するための授業展開・改善のために授業リフレクション（振り返り）が効果的と考えられる。今回は、授業デザイン、授業リフレクションに詳しい鹿毛雅治・慶應義塾大学教職課程センター教授を招いて話を伺った。



### はじめに

加速度的に進展する社会の中で、今まで答がある教育、大学入試をゴールとする教育を行ってきた。しかし、大学入試が抜本的に変わる。これからは答のない時代の教育となる。我々はどのような教育を行っていけば良いのか。

データや情報があふれているが、その情報が知識になり、頭の中に要素としてではなく、まとまりをもって理解が形成され、それが知恵や見識として、その人の中に結実することが学びの深まりである。教育の目的は人間形成である見地から、ただ単に知識だけを多く与えるよりも、理解さらには知恵や見識が育まれていくことが求められる。

### 深い学び

思慮深さは大切である。立ち止まって振り返る、じっくりと考える、本当に良いのか議論する。これは態度の学習であり、その体験をどれほどしているかが問われる。思考の習慣化である。特定の教科だけでなく、学校全体で大事にされることが必要である。

国が学力の 3 要素を出してきた。主体的・対話的で深い学びというキーワードで授業や教育課程を考えていくということであるが、主体的・対話的で深い学びとは何か。深い学びには「これだ」というものがない。つまり、何を学んでも深まっていく。

学力の3要素の「基礎的な知識・技能」で「わかる、できる」に関して重要なことは、そこに見方、考え方が入っていることである。学びが深まって、知識と知識が結びつき、要素がつながり合い理解が形成される。さらに発展させて、疑問がまた疑問を呼び、より分かっていく。いろいろなことを結びつけて説明できるようになる。これが学びの深まりである。要は分かるということは知識のネットワークである。

「できる」とは何か。体験を通し、試行錯誤し、繰り返し、座学を超えて五感を通した体験をして実際に「これか」と言うときに腑に落ちる。五感を通した体験としては日本の初等教育は世界一である。残念ながら中等教育、高等教育になると評判が下がる。我々は初等教育に学ぶところは大変多い。五感を通して感性が育まれる。頭だけの世界ではAIに勝てない。しかし感性にAIはなかなか勝てない。五感、体験を通して分かるということを授業で実現してほしい。

### 思考力、判断力、表現力

「考えるとは何か」と問われ、答えられるか。そもそも「考える」とは何か。定義的には、広義の問題解決をするための内的な心的活動、例えば、頭の中で試行錯誤を繰り返すとか、頭の中で状況を想定して見通しを持つということである。問題解決とは「大問題を考える」と思いがちだが、問題点は基本的にはクエスチョンマークであり、いろいろなレベルがある。クエスチョンマークで思考が始まる。頭の中で、問題解決のための内的な心的活動をする。答のない時代の教育を考えたときに、重要なことは問である。答を教えるのではなく、問うことを学ぶということに転換していく。それにより問題解決や探究や思考が始まる。思考力と言うが、思考は誰でもやっている。思考力とはよく考えることである。よく考えるとは問と気づきのプロセスを考えることである。自問自答とは考えることである。自分の中で問が生まれ、そのことに対して気づき、答える。授業の初めに目標を書き、「今日はこれをやる」という先生がいるが、問がそもそも先生の間である。子供自身の間ではない。最後に「今日はこれがわかったな」というが、子供たちには他問他答である。自分の問が内側に起こり、自分の答を見いだそうとすることが「考える」ということである。

思慮深さは判断を留保することである。判断を留保し、ある視点から見方、考え方が対話で出てくる中で、最終的に決断する。授業とは一人で考えるのではなく、先生も含めてみんなで考える。対話の状況によって、他問自答、自問他答、他問他答が起こる。まさにアクティブ・ラーニングである。

賢さは「ひと・もの・こと」と出会い、関わりを通して全人的に発揮される。例えば共感、コミュニケーション、ワクワク感、充実感、一言で言うと感性である。これらが基板になり意見を言いたくなる。ここがAIに無いところである。

### 感性

言葉になる以前の非言語的、直感的、主観的な知覚と判断を感性という。感性は非意識的に働く。言い換えると、五感である。これを授業に利用したい。

感性の働きとは、知覚して感じる、瞬時の直感（直観）、言葉にならないが感じ取るものである。AIには直観的なことはできない。感性は知性よりも低いものとされてきた。しかし、今はAIと対抗できるのは感性しかないと言われている。

### 表現

表現は大事である。中にあるものを外化する、これが表現である。哲学者カントは、知性と感性をつなぐものとして悟性を析出したが、悟性とは経験を言葉にするという知性である。悟性は一つのキーワードとなる。授業が活性化すると子供たちは生き生きし、楽しくなる。先生も楽しくなる。そのためには表現活動が大事である。

### 没頭

いかに学習に没頭するのか。没頭する授業をどう作るか。知能テストの成績は人生を予測しない。予測するものはGRITと言われている。GRITとは熱意、と粘り強さの二つを併せ持つ力である。熱意と粘り強さは一朝一夕につくのではなく、体験を繰り返してついていく。なぜ没頭が大事かという、エンゲージメント状態になるからである。熱心に取り組む、持続的に取り組む、興味を示す、充実感、チャレンジするような心理状態をエンゲージメントという。それに対するものは非エンゲージメントである。

## 学習意欲

学習意欲とは何か。学びたいと思わないと学習意欲ではない。意思と欲求の複合語が意欲である。入試に合格したいと思うことは合格意欲であって学習意欲ではない。意欲的な体験とポジティブ感情が結びつき、繰り返されると態度形成、習慣形成になる。よりよく考える習慣、思慮深い態度が必要である。まずは先生が思慮深くなければできない。没頭する体験があるからこそ、子供たちにその体験を保障できる。

## 学びの場

コーディネーターとして教師が学びに引き込む場を作り、間接指導をする。今までは直接指導（一斉授業形態）であった。その中で知的な体験、情的な体験、知情意が一体化するような場をどう作ればよいか。コーディネーターの役割だけでなく、その術中にファシリテーター、学びの促進をする役割がある。学び合う環境を作るための授業作りの発想の転換が求められる。

## 授業デザイン

授業デザインとは授業の構想・展開である。授業は構想、展開、省察するサイクル、いわゆる Plan-Do-See である。Plan をたてて、Do して、それで終わるのではなく、そこから See する、リフレクションである。デザインし、リフレクションにつなげていく。リフレクションとは問題解決に向けた探究へと誘う思考のことである。重要なのは、振り返り的なリフレクションと、見通し的なリフレクションである。立ち止まって振り返り、その情報を次の授業に生かしているかどうか。この2つが求められる。これは一人でやるのは限界があるため、校内授業研究が必要となる。なぜ授業研究なのか。よりよい授業をすることで、子供たちの学びが実現するからである。自問自答ではなく、多くで他問自答し、互いによい思考をし、実践に生かしていく。授業研究は学び研究である。発表会と思っている方がいるが、先生のパフォーマンスの場ではない。子供たちがどう学んでいるか、学び研究をするのが授業研究である。多くの目で見ればそれだけ多くの学びの情報を授業者に返してあげられる。授業研究で一番得をするのは授業者である。中学高等学校で小学校にないメリットは教科担任制で、同じ教科で自分が受け持っている生徒を別の教科の授業で見ることができることである。学校をあげ、校内研修の授業を通じて、どのようにして質の高い授業を実現するのかに向けて、個々の学校で取り組んで頂きたい。子供を見るときに、教員は教員の持っている基準で見てしまう。固定的な見方ではなくて、自然にその場を味わう。子供たちの言葉を、なぜこの子はこんな事を言うのかと楽しみ、そういう気持ちで授業参観をする。そのように授業をすると一緒になってエンゲージメントしていくようになる。子供の語りでよくやるのは発表型語りである。これは全然使えない。心に響くような語りは、そのとき思ったことを感性に背景があってそれを知性で表現している。まさに悟性を働かせながらコミュニケーションする。発表型語りはきっかけとしてはよいが、即興型語りを大事にするような授業をやりたい。

## まとめ

これからの授業づくりに向けて大切なことは答のない時代に賢さを育み、一瞬一瞬のすべてに着目し、楽しい思い出をつくる面白い授業を行うことである。面白いということは重要であり、知的、感性、両方が働いている。その中で学びの真顔が出てくる。良い授業というのは子供が良い表情をする。子供だけではなく先生も良い表情をする。これが非常に重要である。

◆学校視察◆「青山学院高等部中等部」

午後からは青山学院中等部、高等部にて学校視察を行った。まず渡辺健部長より高等部の紹介があり、教育目標として、①キリスト教教育、②教科教育（与えられた知識の活用を重視している）、③共生教育、④グローバル教育を定めており、カリキュラムの中に選択科目（3年生になると29中15単位がある）の4つを取り入れ、授業を通して思考力・表現力を磨いていることが説明された。



続いて、敷島洋一部長より中等部の紹介があり、

教科センター方式を活用することで、教科専用教室を設け、授業準備時間の短縮を実現し、生徒は毎時間移動教室となり、新鮮な気持ちで授業を受けることができる環境となっていることが説明された。

その後、5・6時間目に行われた授業が公開され、様々な教科の授業を参加者が自由に見学した。高等部では、思考力・表現力を磨く選択科目2単位を含む多数の授業を見学でき、大講堂ではスーパー・グローバル・ハイスクールの説明も行われた。中等部では教科センター方式教室での授業や、生徒たちが自由に調べ学習ができるメディアスペースといった独特な風景を見学することができた。公開された授業は以下の通りである。



第5限

学年	教科	学年	教科
中1	国語	高1	数学Ⅰ・A
中1	理科Ⅰ	高1	世界史A
中1	英語	高1	コミュニケーション英語Ⅰ①
中1	美術	高2	聖書
中1	体育（男子）	高2	現代文B
中1	体育（女子）	高2	現代社会
中1	技術	高2	英語表現Ⅱ
中1	家庭	高2	現代文B
中2	音楽	高2	英語表現Ⅱ
中2	地理	高2	古典B
中2	国語	高2	古典B
中2	英語	高2	数学Ⅱ
中2	理科Ⅰ	高2	英語表現Ⅱ
中2	英語	高2	化学基礎
中2	体育（男子）	高3	リスニング・コンプリヘンション
中2	体育（女子）	高3	韓国・朝鮮語
中3	聖書	高3	ドイツ語

中 3	理科Ⅱ	高 3	英語演習 B
中 3	英語 R	高 3	数学演習 A
中 3	聖書	高 3	数学Ⅲ (β)
中 3	数学	高 3	数学演習 A
中 3	数学	高 3	地理特講
中 3	英語	高 3	国語表現
中 3	美術	高 3	化学 I
高 1	聖書	高 3	地学
高 1	国語総合	高 3	食物基礎
高 1	聖書	高 3	工芸 I・II
高 1	社会と情報	高 3	美術立体
高 1	国語総合	高 3	書道 I・II
高 1	コミュニケーション英語 I ②	高 3	球技 A
高 1	コミュニケーション英語 I ③	高 3	球技 B

### 第 6 限

学年	教 科	学年	教 科
中 1	理科 I	高 1	数学 I・A
中 1	地理	高 1	国語総合
中 1	国語	高 2	英語表現Ⅱ
中 1	美術	高 2	英語表現Ⅱ
中 1	体育 (男子)	高 2	現代文 B
中 1	体育 (女子)	高 2	数学Ⅱ
中 1	技術	高 2	古典 B
中 1	家庭	高 2	古典 B
中 2	英語	高 2	聖書
中 2	国語	高 2	現代社会
中 2	歴史	高 2	化学基礎
中 2	理科 I	高 2	物理基礎
中 2	地理	高 2	物理基礎
中 2	理科Ⅱ	高 3	韓国・朝鮮語
中 2	体育 (男子)	高 3	ドイツ語
中 2	体育 (女子)	高 3	英語演習 B
中 3	英語	高 3	数学演習 A
中 3	聖書	高 3	数学Ⅲ (β)
中 3	国語	高 3	数学演習 A
中 3	理科Ⅱ	高 3	地理特講
中 3	聖書	高 3	国語表現
中 3	美術	高 3	リスニング・コンプリヘンション
中 3	技術	高 3	化学 I
中 3	家庭	高 3	地学
高 1	世界史 A	高 3	食物基礎
高 1	世界史 A	高 3	工芸 I・II
高 1	数学 I・A	高 3	美術立体
高 1	数学 I・A	高 3	球技 A
高 1	聖書	高 3	球技 B
高 1	数学 I・A		

#### ◆分散会◆「新・学習指導要領と高大接続の観点から授業改善と評価を考える」

参加者は担当教科等で6グループに分かれ、①「新・学習指導要領と教育課程」や「大学入学共通テストと教育課程」に関するカリキュラム編成や授業改善について、②評価に関して「主体的・対話的で深い学びの評価」や「ポートフォリオあるいは観点別評価」について、さらに③道徳と私学の独自性、④教員の意識改革等について、自校の事例紹介や問題提起等を行いながら情報交換を行った。

各グループの教科及び司会・指導助言は、主に数学科の先生方のグループを清水哲雄 専門委員長（学校法人鷗友学園理事長）と鈴木弘 専門委員（香蘭女学校中等科高等科校長）、社会科を北村 聡 専門委員（京都外大西高等学校校長）、国語科を助川幸彦 客員研究員（学校法人村田学園前副理事長）、外国語（英語）を山崎吉朗 主任研究員、理科及びその他の教科（保健体育・工業等）を山本与志春 客員研究員（学校法人青山学院常務理事）、管理職のグループを大多和聡宏 専門委員（開星中学高等学校理事長・校長）の7名が行った。各グループは、参加された全員が積極的に参加できるよう、さらに小グループを編成したり、全体を通して情報が共有できるように時間を決めて一言ずつ発言頂く等、短い時間であったが、グループ毎に工夫をこらして会を進行した。



#### ◆総括・閉会式◆

閉会式では、清水哲雄・専門委員長より以下の総括が行われた。

文部科学省の講演では、新・学習指導要領、大学入試に関して、内容や今後の動向について伺い、今後各学校のカリキュラム編成等の参考になったのではないかと考えている。鹿毛先生からは、本来の教育の姿を考えようと言われている感じを受けた。教育の本来的なものは大きくは変わっていない。いろいろな情報に振り回されないような教育を行っていかねばならないと考えさせられた。青山学院の視察については羨ましい限りであった。校舎も素晴らしいが教育内容も素晴らしい。学ぶことが多かったと思う。分散会では様々な課題や問題点を抱えて当部会に参加頂いていることをひしひしと感じた。時間が短く十分な議論が出来なかったことが残念であった。これらを踏まえて、新たな取り組みを当部会として企画していきたいと考えている。



#### ◆参加者アンケートより◆ 回答数：98名／参加者数150名（回答率65.3%）

##### ●研修会への参加動機

文部科学省関係者の報告（講演）が参加の動機として突出し、また学校からの勧奨も多く、新・学習指導要領や大学入試の情報に多くの関心が集まっている。その他、学校視察や情報交換にも関心が寄せられている。

##### ●講演Ⅰ「新・高等学校学習指導要領と大学入学共通テストについての動向・解説」（高等学校学習指導要領改訂）【淵上・文部科学省初等中等教育局教育課程課長】

「新しい情報がなかった」という指摘も若干あったが、「参考になった」、「理解が深まった」等の感想が多く。全般的にはよかったが、「教科や科目毎の説明」、「ポイントを絞って欲しい」、「もう少し詳しく聞きたい」、「時間が短い」との意見もあり、関心の高さが伺えた。

##### ●講演Ⅱ「新・高等学校学習指導要領と大学入学共通テストについての動向・解説」（大学入学共通テスト）【山田・文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長】

「参考になった・理解できた」等の感想も多かったが、多くの方が実施が近づいているにもかかわらず詳細が分からないこと等に不安を抱えている。英語の民間試験の受験期間が高校3年生時ということに関しても疑問の声が上がっている。また、e-ポートフォリオについても詳細が聞きたいと言った声もあった。

●講演Ⅱ「『主体的・対話的で深い学び』の授業をデザインするための授業リフレクション」

【鹿毛雅治・慶應義塾大学教職課程センター教授】

かなり多くの内容が話された講演であったが、参加者のほぼ全員が、「興味深い」、「参考になる」といった感想であった。また、「もう少し詳しく聞きたい」、「実践例も聞きたい」という意見も多かった。

●学校視察

中等部ではゆとりのある先進的な校舎やICT設備への興味もあったが、一番の興味・関心があったのは教科センター方式であった。高等部では多彩な授業にも関心が寄せられていた。

●分散会

各グループとも実践や課題、悩みを共有し、情報交換が行われ、有意義であったという感想が多かった。協議された内容には、カリキュラム、民間英語検定試験、ICT（活用状況、設備状況）、アクティブ・ラーニング、e-ポートフォリオ等があげられた。なお、各グループのほとんどから時間が短く、グループの人数が多すぎるとの指摘があった。

●今回の研修会全体について

文部科学省担当官の講演については、最新情報や詳細な情報を求める声もあったが、概ね全てのプログラムは、有意義で満足頂いた。ただし、今回募集人員120名のところ150名の参加者を受け入れてしまい、会場がかなり狭くなったことから、前方のスクリーンが見づらくなる等の不都合が生じた。

●会期についての希望

現状と同じ時期の希望が多かったが、夏期休暇等での開催を希望する声もあった。

●開催地についての希望

東京での開催の希望が多いが、大阪等西日本での開催を希望する声もあった。

●テーマ（内容）についての希望

今後のテーマの希望としては、今回の新・学習指導要領や高大接続を継続して希望する声があったが、最も多く希望があった内容はe-ポートフォリオであった。次いで評価（観点別評価等）の希望が多い。少数ではあるが、ICT、カリキュラムマネジメント等の希望もあった。

◆都道府県別参加者数◆

No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数
1	北海道	4	17	石川	2	33	岡山	1
2	青森	1	18	福井	0	34	広島	4
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	1
4	宮城	6	20	長野	5	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	0	37	香川	0
6	山形	3	22	静岡	3	38	愛媛	1
7	福島	1	23	愛知	15	39	高知	1
8	新潟	6	24	三重	3	40	福岡	8
9	茨城	3	25	滋賀	1	41	佐賀	0
10	栃木	1	26	京都	7	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	11	43	熊本	0
12	埼玉	2	28	兵庫	5	44	大分	0
13	千葉	6	29	奈良	2	45	宮崎	0
14	神奈川	9	30	和歌山	0	46	鹿児島	2
15	東京	35	31	鳥取	0	47	沖縄	0
16	富山	1	32	島根	0			
							合計	150
							参加都道府県数	30